

日本都市計画学会

学 会 賞

特別功労表彰 功績賞・国際交流賞

2024年 年間優秀論文賞

受賞一覧ならびに授賞理由書

公益社団法人

日本都市計画学会



# 目 次

## 1. 学会賞

1) 受賞作品 .....	1
2) 選考経過 .....	2
3) 授賞理由 .....	3

## 2. 特別功労表彰 功績賞・国際交流賞

1) 受賞者 .....	10
2) 選考経過 .....	11
3) 授賞理由 .....	12

## 3. 2024 年 年間優秀論文賞

1) 受賞論文 .....	14
2) 選考経過 .....	14
3) 授賞理由 .....	15

## 日本都市計画学会 学会賞受賞者

(受賞者敬称略)

### <石川賞>

宇都宮 LRT 導入における構想期からの官学民連携

栃木県知事 福田 富一  
宇都宮市長 佐藤 栄一  
宇都宮大学名誉教授 古池 弘隆  
早稲田大学教授 森本 章倫  
市民団体「雷都レールとちぎ」代表 奥備 一彦

公益信託世田谷まちづくりファンド

世田谷まちづくりファンド運営委員会  
一般財団法人世田谷トラストまちづくり  
三井住友信託銀行  
世田谷区

箱根土地株式会社と分譲地・学園都市 ～取締役社長中島陟関係文書

株式会社サトウ

### <計画設計賞>

仮説を設定し、継続的な実験により複合的な課題を解決する交通まちづくりの取り組み

札幌都心交通研究会

### <論文賞>

高松 海城町の物語 ―瀬戸内の海城が開いた都市デザイナー―

西成 典久

### <論文奨励賞>

都市生活における余暇の時空間に関する研究 ―都市計画への示唆―

岡田 潤

ウォーカビリティを高めるソフトマネジメントに関する研究  
―「歩きやすさ」と「休みやすさ」の都市デザインへ―

井桁 由貴

京都におけるオーバーツーリズム期の簡易宿所の変容と急増が地域に及ぼす影響に関する研究

川井 千敬

全国の二次医療圏を対象とした地域特性・医療と介護資源・地域医療構想の関連構造分析

楠 拓也

戦前期から戦後復興期の仙台に関する都市史的研究 ―都市計画の展開と広域都市地域の形成をめぐる―

齋藤 駿介

テンポラリーパブリックアートの実現プロセスにみる公共性に関する研究

常泉 佑太

移動行動に表出される多様な空間嗜好の逆推定に関する数理的研究

羽佐田 紘之

戦時期建築界における社会革新の構想 ―建築学会と建築行政の連携体制とその政策思想に関する研究―

常松 祐介

近代台湾における都市生活施設の形成史

三文字 昌也

地方圏の地域づくりにおける地域外の人材の活用に関する研究 ―遠隔地に居住する人材に着目して―

西村 忠士

旧横浜山手居留地における震災復興期の土地所有形態と土地利用に関する研究

白川 葉子

The Birth and Development of Greater Colonial Seoul (kejjo) (1920-1945)

金 榮俊

## 日本都市計画学会

### 学会賞 選考経過

2024 年度学会賞は、会員が推薦した石川賞候補 3 件、計画設計賞候補 1 件、論文賞候補 3 件、論文奨励賞候補 15 件、計 22 件が審査の対象となった。

表彰委員会（学会賞選考分科会・委員全 16 名）は各々の候補の業績について複数の担当審査委員が独立に査読および調査を実施し、各委員から提出された評価にもとづき、分科会で慎重に検討の結果、授賞候補を選定した。

特に評価の分かれた案件については委員会席上でその結果を照合、討論、協議し、分科会の最終審査結果とした。さらに分科会の審査結果を理事会に諮って、石川賞 3 件、計画設計賞 1 件、論文賞 1 件、論文奨励賞 12 件の授賞を決定した。

---

#### (参考)各賞の授賞対象

##### 石川賞

都市計画に関する独創的または啓発的な業績により、都市計画の進歩、発展に 顕著な貢献をした個人または団体を対象とする。

##### 計画設計賞

都市計画に関する計画、設計、事業などに関する近年（概ね過去 3 年以内）の作品で、都市計画の進歩、発展に顕著な貢献をしたものを対象とする。

##### 論文賞

都市計画の進歩、発展に顕著な貢献を認められる研究論文を近年（概ね過去 3 年以内）発表した会員（個人）を対象とする。

##### 論文奨励賞

都市計画に関する将来性・発展性が顕著な研究論文を最近（過去 1 年以内）発表した会員（個人）を対象とする。

石川賞	
作品名	宇都宮 LRT 導入における構想期からの官学民連携
受賞者	栃木県知事 福田 富一・宇都宮市長 佐藤 栄一・宇都宮大学名誉教授 古池 弘隆 早稲田大学教授 森本 章倫・市民団体「雷都レールとちぎ」代表 奥備 一彦
授賞理由	<p>本業績は、日本初の全線新設 LRT である宇都宮 LRT の 2023 年 8 月の開業と、そこに至るまでの 30 年にわたる官学民連携のプロジェクトである。宇都宮 LRT が開業してからは、予想を上回る利用者数、自動車利用の削減、沿線人口の増加等によるコンパクトシティへの貢献等により全国紙等でも取り上げられる交通まちづくりの顕著な成功事例と言える。</p> <p>特に評価される点は、第一に、全線新設 LRT を実現させたことそのものである。TOD 先進国と言われながらもモータリゼーションの進む日本、特にそれが顕著な北関東において、新たな公共交通オプションを実体として示した。自動車に依存した地方都市においても、公共交通とまちづくりの連携した取り組みにより、都心のにぎわいを取り戻し、市民の生活が変えうることは、欧州の事例では知られていたが、それを日本でも実証した本業績の価値は顕著である。第二に、30 年にわたるプロセスを官学民連携で成し遂げた点である。その経緯からは幾度かの困難に遭ったことが窺われるが、常に官学民がそれぞれの役割を担いつつ連携して、30 年かけて宇都宮 LRT の実現に至っている。その実現に特に貢献したキーパーソンとされる候補者 5 名のうち、首長 2 名は一貫して LRT 導入を支え、学識 2 名は長期的に専門家として支援し、市民団体代表は地元の導入に向けてのムーブメントの醸成に寄与してきた。</p> <p>気候変動が喫緊の課題になっている世界の状況や、人口減少・少子高齢化が進む我が国の状況において、また、人中心の都市空間を実現するためにも、公共交通の充実とそのための新たな方策は不可欠である。本業績は、他都市に先んじてその取り組みを進め、実現し、さらなる展開を目指している啓発的な業績と言える。したがって、本業績は日本の都市計画の発展に顕著な貢献をしていると考えられ、日本都市計画学会石川賞に相応しいと判断した。</p>

石川賞	
作品名	公益信託世田谷まちづくりファンド
受賞者	世田谷まちづくりファンド運営委員会・一般財団法人世田谷トラストまちづくり 三井住友信託銀行・世田谷区
授賞理由	<p>公益信託世田谷まちづくりファンドは、1992 年、公益信託制度を用いて設立された基金であり、30 年以上も継続して活動を続けてきた。当ファンドの応募件数は、30 年間（2022 年まで）で延べ 1084 件、助成件数は 866 件にのぼり、助成金総額は約 2 億 3800 万円、助成対象は延べ 433 グループと、市民主体のまちづくりとしての実績・成果は、全国的に見て極めて顕著である。</p> <p>特に高く評価される点として、ファンドの仕組みが単に資金を助成するだけではなく、世田谷トラストまちづくりが活動を支援していること、行政と区民だけではなく、企業も寄付という形で参画する包括的な仕組みとなっていること、運営委員にファンドの卒業生が複数関与するようになっており、自分たちが提案した活動の推進に留まらず、広くまち全体のまちづくりに関与しようという人財の発掘・増加にも大いに寄与していることが挙げられる。いわば、我が国のまちづくりファンド、中間組織のモデルとなったと評価できよう。</p> <p>近年、全国的に自治体の都市計画が大規模な再開発等に注力されることが多く、市民主体の地域に根差した地道なまちづくり活動に対する公的な関与・支援の動きが、以前に比べて低下している状況にある。しかし、今後、時代のニーズに合わせて生活圏として再生を進めていく必要性が高まっている今、地域に根差したまちづくり活動との連携・協働が必至である。そのためには、公益信託世田谷まちづくりファンドによる市民主体のまちづくりへの継続的な支援活動の重要性・必要性・効果を広く社会において再認識・共有することは、極めて重要である。</p> <p>以上の理由から、都市計画に関する独創的・啓発的・継続的な業績により、都市計画の進歩・発展に顕著な貢献をしていると評価し、日本都市計画学会石川賞に相応しいものと判断した。</p>

石川賞	
作品名	箱根土地株式会社と分譲地・学園都市 ～取締役社長中島陟関係文書
受賞者	株式会社サトウ
授賞理由	<p>本表彰対象は、東京都国立市に本拠を置き、住宅用建築資材の製造・卸売及び施工を主な社業としている株式会社サトウが創業 70 周年記念事業として出版した箱根土地株式会社関係史料の図録である。この図録には、東京の郊外住宅地や軽井沢別荘地、箱根のリゾート開発を先導したことで知られる箱根土地株式会社で代表取締役を務めた中島陟氏（1889 年生—1958 年没）が収集し、ご子息に受け継がれ、さらに国立のまちづくり活動を機縁としてサトウが寄贈を受け、保管してきた土地開発関係の史料が、都市計画史家の越澤明氏による監修のもと、全てカラー刷りで掲載されている。最も充実しているのは国立大学町関係に関する史料だが、その他にも中島陟氏の生涯を理解するための史料から、軽井沢、箱根、都内の大名屋敷・御屋敷町各所、目白文化村、新宿園、渋谷百軒店、大泉学園都市、小平学園分譲地、多摩湖鉄道、狭山丘陵開発に関する史料まで、日本の近代都市・地域形成史上、欠かすことのできない開発事業についての史料が収録されている。箱根土地株式会社を中核とした西武鉄道はこれまでに社史を発行したことがなく、これだけの質、量の同社関係史料が公開されたのは初めてである。このような図録が全て一民間企業の手により出版されたこと、そしてオンラインでも同図録をデジタルで公開し、誰でもアクセスが可能となっていることも特筆すべきである。この図録は、今後の近代都市・地域形成史に関する研究に大いに活用されるとともに、各地域の歴史的環境の保全や継承活動を後押しするものとなるだろう。つまり、この図録は、民間企業の公益活動、地域活動の模範としての価値と収録された史料群の持つ資料的価値の両面において、極めて啓発的であり、都市計画の進歩、発展に顕著な貢献を果たしている。以上より、日本都市計画学会石川賞を授賞するに相応しいと判断した。</p>

## 計画設計賞

作品名	仮説を設定し、継続的な実験により複合的な課題を解決する交通まちづくりの取り組み
受賞者	札幌都心交通研究会
授賞理由	<p>本取組は、札幌都心という多様な利害関係者が存在する都市空間において、交通とまちづくりの両面から複雑な課題に継続的に取り組んできた実践的かつ先導的な事例である。任意団体が中心となり、約 20 年にわたり社会実験の実施と検証を重ねながら、都市交通環境の改善と地域の賑わい創出を目指してきた点は特筆に値する。行政、民間、地域住民、学識者など多主体の連携により、仮説を設定した段階的な施策展開と、社会実験の成果を具体的な事業・制度に反映させてきたプロセスは、他都市への波及可能性も含め、今後の都市空間の計画・設計のモデルとなるものである。また、自転車、荷捌き、貸切バス、道路空間の利活用といった個別のテーマに対して部会を設置しつつ、都市空間の快適性や利便性を追求してきた点も評価される。長期間にわたる協議と柔軟な対応により、制度の枠組みを超えた協働の実践例として、日本都市計画学会計画設計賞に相応しい成果である。</p>

## 論文賞

作品名	高松 海城町の物語 ー瀬戸内の海城が開いた都市デザインー
受賞者	西成 典久
授賞理由	<p>本書は、地方都市の高松を海城町という着眼点から、城という都市施設であり歴史的資源が都市発展のプロセスに果たした役割を丁寧に著した秀逸な作品と言える。そしてこの論旨を単に都市形成史だけではなく、景観・都市デザイン学の分野も含め、横断的に分析し、論じているもので、精緻な分析とともに従来には例を見ない学術的特徴を有しており、学術成果としても新規性をもつものである。</p> <p>同時に本作品のもう一つの優れた点として、読者対象を専門家と限定せず、広く一般の読者や中高生でもわかりやすく、読んでいても飽きさせないように、図版、挿絵、コラムなど多彩な工夫を随所に施した編集を行なった書籍として発刊したところである。これによって、学術的であると同時にその知見を広く社会に伝搬させることもできる優れた著書となっている。</p> <p>以上のように学術的な質と同時に一般社会への訴求力を持った書籍にまとめたことは、都市計画の進歩と発展に対して大変優れた業績であり、日本都市計画学会論文賞に相応しいと判断した。</p>



## 論文奨励賞

作品名	都市生活における余暇の時空間に関する研究 ー都市計画への示唆ー
受賞者	岡田 潤
授賞理由	<p>本論文は、都市生活における余暇活動をテーマに、東京都市圏や東京都心を対象として、テレワークの導入によるライフスタイルの変化、職住近接による余暇時間増大等の効果、職住遊近接を实践する就業者の生活行動や劇場集積地区の空間構成など、幅広い視点から多面的な分析を行うとともに、今後の都市計画に対する提案を示した力作である。</p> <p>評価できる点としては、第一に、全国規模の膨大なアンケート調査をはじめ、人流データ、施設のポイントデータ等の多様なデータを用いて定量的な分析が丁寧になされており、その結果が示唆に富んでいることである。第二に、分析結果を基に、都市計画や都市政策を通じて余暇生活の質を高めるための具体的な方策が多数提示されており、社会的な有用性も高いと考えられる。以上から、本論文は日本都市計画学会論文奨励賞に相応しいと判断した。</p>

## 論文奨励賞

作品名	ウォーカビリティを高めるソフトマネジメントに関する研究 ー「歩きやすさ」と「休みやすさ」の都市デザインへー
受賞者	井桁 由貴
授賞理由	<p>本論文は、都市のウォーカビリティ向上を目指す上で、「歩きやすさ」と「休みやすさ」に着目し、空間の質的向上を実現する新たな都市デザイン手法として「ソフトマネジメント」を提案したものである。特に、LiDARを活用した歩行者行動の詳細な分析を通じて、短期間の空間改善と行動変化を段階的に捉える手法は新規性が高く、都市計画分野における新たな技術活用の可能性を示している点で評価される。また、国内外の施策や研究動向を丁寧に整理することで、ウォーカビリティの概念的整理と計画手法の体系化にも寄与している。さらに、複数の都市空間を対象とした実証や、ロンドンとの比較を通じて、都市の制度設計や戦略的な実施体制に関する具体的な提言を行っており、実務への応用可能性も高い。以上より、本論文は日本都市計画学会論文奨励賞に相応しいと判断した。</p>

## 論文奨励賞

作品名	京都におけるオーバーツーリズム期の簡易宿所の変容と急増が地域に及ぼす影響に関する研究
受賞者	川井 千敬
授賞理由	<p>本論文は、近年大きな社会課題となっている京都市におけるオーバーツーリズムに関して、その受け皿となっている簡易宿所に着目し、簡易宿所の急増が地域構造に与える影響を詳細な調査と実証的な分析により明らかにした論文である。すなわち、簡易宿所の歴史的経緯や旅館業法における位置づけ等を丁寧に整理した上で、その法的な定義づけを明確にしており、また、旅館業法に基づく許可施設一覧データより、その立地特性を空間的に整理し、地価上昇という地域への影響を重回帰分析による定量的な把握を試み、住環境保全のための立地制限等の対応策の提案や、コロナ禍を経た簡易宿所の廃業等の特性を踏まえ、再びオーバーツーリズムが懸念される京都市における対策への示唆を記したユニークな論文であると評価できる。これら一連の分析を通じて、観光と都市計画を融合した新しい政策モデルの提唱を行っていることから、本研究は日本都市計画学会論文奨励賞に相応しいと判断した。</p>

論文奨励賞	
作品名	全国の二次医療圏を対象とした地域特性・医療と介護資源・地域医療構想の関連構造分析
受賞者	楠 拓也
授賞理由	<p>本論文は、超高齢化社会を迎えようとしているわが国が直面する医療・介護に関する課題について、施設立地を中心に据えて、都市・地域計画へのフィードバックを念頭に置いた全国規模の分析結果を示している。</p> <p>構造方程式モデリング、多母集団同時分析などの分析手法を駆使し、さらに地域医療構想の記載の違いも分析し、地域特性と、医療資源の分布と介護資源の分布の関連構造を明らかにした。</p> <p>「高齢者集中性」「都市性」「中密度人口性」などの指標を用いて、地域特性別に、医療資源・介護資源の分布実態や課題を明らかにしていること、医療・介護分野にまたがる多種多様な施設タイプを対象にした実態把握から、立地適正化計画にかかる指標のあり方や今後の用途変更の必要性にまで視野を広げた考察がなされていること、医療・介護の需要予測や施設の最適配置の検討のための各種データの環境整備について具体的な提案がなされていることなどが高く評価できる。以上より、日本都市計画学会論文奨励賞に相応しいと判断した。</p>

論文奨励賞	
作品名	戦前期から戦後復興期の仙台に関する都市史的研究 —都市計画の展開と広域都市地域の形成をめぐって—
受賞者	齋藤 駿介
授賞理由	<p>本研究は、仙台を主対象として、特に戦前から戦後復興期までの都市計画を通して目指された都市像や都市空間形成の特徴を通史的かつ網羅的に明らかにすることにより、近代日本における研究蓄積の乏しい地方都市の都市計画の特徴の解明を試みた意欲的な研究である。公文書や議事録といった文書、地図や空中写真といった空間を把握できる史料を、可能な限り網羅的に調査し、実態を把握した力作であり、丹念な史料発掘とその読み込みに基づいた新たな知見が多数含まれており、極めて価値の高い研究であると判断できる。戦前から戦後直後までの都市計画空白期の実態を解明し、時間的に連続させた意味でも、非常に有用である。なお本研究は、仙台を対象としているが、本研究方法を踏まえ、他都市の解明に寄与できる可能性が高い。本研究は、都市計画に関する将来性・発展性に大きく寄与できると判断でき、日本都市計画学会論文奨励賞に相応しい内容を有していると判断した。</p>

論文奨励賞	
作品名	テンポラリーパブリックアートの実現プロセスにみる公共性に関する研究
受賞者	常泉 佑太
授賞理由	<p>本論文は、テンポラリーパブリックアートという研究の蓄積が少ないテーマに果敢に取り組み、2010年代に行われた企画主体が異なる複数のテンポラリーパブリックアートの実現プロセスの比較から、都市の公共空間の社会的役割の可能性と都市計画の中でのアートの位置づけを再考し、査読論文2本の内容を中心として全8章で構成された博士学位論文である。</p> <p>事例は東京都(NPO)、大阪府(自治体)、横浜市(社会的企業)が選定され、展開された各事業の詳細とアートマネジメントの役割について論じている。関係者の役割・意識等を詳細に把握し、それを「公共性」という視点から比較・評価しており、今後このテーマの研究を発展させていく上での基礎的な研究として評価できる。インタビューに基づく質的研究というアプローチもユニークである。丹念な調査と、その分析に基づくテンポラリーパブリックアートの公共性に関する3次元ベクトル表現などの提案は大変興味深く、日本都市計画学会論文奨励賞に相応しいと判断した。</p>

## 論文奨励賞

作品名	移動行動に表出される多様な空間嗜好の逆推定に関する数理的研究
受賞者	羽佐田 紘之
授賞理由	本研究は、好ましい空間への移動行動を表す「表出データ」から、各空間の包括的な魅力度を逆推定し、「多様な嗜好を捉える」ための新たな方法論を提案した研究であり、査読付き論文2編、査読付き国際会議論文3編等を基に構成される。誤差項を加味した効用の比較に基づく経路選択の逆問題としてISPP（逆最短経路問題）を捉え、周遊データによる観光地の嗜好、訪問データによる道の駅の嗜好、車両軌跡データによる道路リンクの嗜好の3つから、独自のモデルの有効性を確認している。このモデルでは、個人属性によるセグメント分類や確率分布の仮定を事前に行う必要がなくなり、ステレオタイプの影響を除き、実際の移動行動データのみからマイノリティを含む多様な空間嗜好を捉えることを可能にしている。方法のオリジナリティや有効性、発展性の点で高く評価できると考えられる。よって、本研究は日本都市計画学会論文奨励賞に相応しいと判断した。

## 論文奨励賞

作品名	戦時期建築界における社会革新の構想 —建築学会と建築行政の連携体制とその政策思想に関する研究—
受賞者	常松 祐介
授賞理由	本論文は建築行政官と建築学会に着目し、両者の連携体制およびその政策思想を中心に、戦時期建築界の一連の活動を分析し、その成果や課題を明らかにした研究である。これまで内務省都市計画、建築取締行政、防空都市計画、地方都市計画、国土計画などの各論の歴史研究において、それらを担う職能としての行政官との関わりは研究されてきたが、行政組織の内部へと進出した建築行政官について、都市防空や住宅供給といった重要な国策分野で指導的な役割を担った建築テクノクラートという枠組みで、これらを再照射した研究である点に独創性がある。とりわけ、膨大な著書・論考・メモを読み解きから理念や問題意識を見出した点は高く評価できる。よって、本論文は、日本都市計画学会論文奨励賞に相応しいと判断した。

## 論文奨励賞

作品名	近代台湾における都市生活施設の形成史
受賞者	三文字 昌也
授賞理由	本研究は、日本統治時代から戦後期における台湾を対象に、これまであまり研究の対象とされてこなかった公衆浴場、露天、遊郭といった「都市生活施設」の形成過程を、都市内の複数主体同士の相互関係による「都市内政治過程」に注目して読み解いた研究である。現地新聞等を1次資料として、それらを読み解きながら丁寧な分析を行った研究であり、3種の都市生活施設毎の分析にとどまらず、3種を総合した相互の関係性までが考察されており、一つの史論としてまとめることに成功している。その一方で、年表や地図等の図版が丁寧に作図され、資料的な価値とともに雑学的な面白さもある。本研究にて描出された近代化初期の都市内政治過程にくらべると、現代のそれははるかに複雑化している。都市内政治過程の近代化については、都市社会学、政治学などにおいて多くの蓄積があり、それらと本研究を接続させることによって、現在の都市における普遍的な「都市生活施設形成論」に展開させていくことができるのではないだろうか。以上より、日本都市計画学会論文奨励賞に相応しいと判断した。

論文奨励賞

作品名	地方圏の地域づくりにおける地域外の人材の活用に関する研究 —遠隔地に居住する人材に着目して—
受賞者	西村 忠士
授賞理由	本論文は、地域外に居住する人的資源を地域づくりに活かすための方策を導き出す研究である。全国の自治体を対象としたアンケート調査の分析を通じて、多様な取り組みへの影響や人材不足解消の面で地域団体の存在が重要である事を指摘するとともに、自治体の会員制度の分析から、経済的意義、関係深化の意義、交流の意義という3つの意義を確認している。さらにふるさと納税寄付者へのアンケート調査から、寄付者が共感できる仕組みづくりの重要性や、地域団体による関与を通じた人材育成への貢献について論じ、同制度の発展方策を導き出した。以上の分析を通じて、自治体が外部人材を活用する上で、地域ビジョンを基にした戦略、組織、施策の組み立てが重要で、それぞれに対する方策やプロセスを体系的に整理しており、新規性・独創性も高いことから、本研究は日本都市計画学会論文奨励賞に相応しいと判断した。

論文奨励賞

作品名	旧横浜山手居留地における震災復興期の土地所有形態と土地利用に関する研究
受賞者	白川 葉子
授賞理由	本研究は、旧横浜山手居留地を対象に、震災復興期における土地所有形態の変化と土地利用の変容との関係を、旧土地台帳を基礎史料とした筆単位の調査により明らかにした労作である。横浜市による永代借地権の買収や市有地の転売、土地の細分化といった変容とともに、震災前の景観や旧居留地に由来する文化が継承され、現在の歴史的環境の基盤となっている点を、精緻な作業により実証的に明らかにしており、学術的な価値は極めて高い。近代居留地史、近代都市計画史、近代日本史などの分野の研究を踏まえ、より広い学術的文脈の中での位置付けや研究領域の開拓につなげることが望まれる。また、著者は調査成果をアーカイブ化し、研究者・住民・訪問者をつなぐポータルとしての展開を視野に入れた活動に取り組んでおり、旧横浜山手居留地における歴史的環境保全への実践的な貢献が期待される。以上の理由により、日本都市計画学会論文奨励賞に相応しいと判断した。

論文奨励賞

作品名	The Birth and Development of Greater Colonial Seoul (keijo) (1920-1945)
受賞者	金 榮俊
授賞理由	本論文は、1920-45年の植民地期の京城（ソウル）における大都市圏（大京城）の都市計画史に取り組んだ研究である。植民地都市の都市計画史研究ではあまり扱われてこなかった、広域都市圏に着目した研究として評価できる。また、研究への着眼が現代のソウル大都市圏の形成とその抱える課題に向けられており、単なる歴史研究に終始していない点に独自性がある。また、これまでの各分野における都市計画史研究成果を再構成し、市民、日常生活、通勤といった枠組で、植民地都市計画という一面的な見方ではない都市圏計画史に取り組んでいる点も興味深い。さらに、当時の都市生活を読み取るうえで、史料の解釈・解説に加えて、人口・社会・交通に関する定量的なデータを利用した歴史GISによる分析を提示している。この手法は、他都市の都市計画史研究にも適用可能な応用性を有している。以上のことから、本論文は、日本都市計画学会論文奨励賞に相応しいと判断した。

## 日本都市計画学会 特別功勞表彰 功績賞・国際交流賞受賞者

(受賞者敬称略)

### <功績賞>

田中 清剛 公益社団法人 2025 年日本国際博覧会協会 理事・副事務総長  
黒瀬 重幸 福岡大学 名誉教授

### <国際交流賞>

浅見 泰司 東京大学  
Uta Hohn ボーフム大学地理学研究所

## 日本都市計画学会

### 特別功労表彰 功績賞・国際交流賞 選考経過

2025年日本都市計画学会特別功労表彰 功績賞・国際交流賞は、理事・監事・会長アドバイザー会議メンバー各位に候補者の推薦を募ったところ、候補者の推薦があった。これを受け、表彰委員会（委員全10名）が慎重に検討した審査結果を理事会に諮って、功績賞2名、国際交流賞2名の授賞を決定した。

---

#### (参考)特別功労表彰(功績賞・国際交流賞)の授賞対象

##### 功績賞

長年にわたって都市計画学の進歩、発展に寄与してきた者でその貢献が社会的、学問的に見て顕著な者を対象とする。

##### 国際交流賞

長年にわたって都市計画の国際的交流に携わり海外諸国との交流並びに啓発普及と人材育成に貢献した者（外国人・日本人）を対象とする。

功績賞	
受賞者	田中 清剛(公益社団法人 2025 年日本国際博覧会協会 理事・副事務総長)
授賞理由	<p>田中清剛氏は、1975年に京都大学大学院工学研究科土木工学専攻修了後、大阪市に入庁し2011年の退職まで主に建設行政に従事された。その後、2012年から2019年まで大阪市副市長、2019年から2023年まで大阪府副知事として、大阪府市の都市計画および建設行政全般に携われ、高度経済成長期からバブル期、バブル崩壊以降人口減少期と約半世紀にわたり時代とともに地方自治体に対する行政ニーズの変化に、常に先進的な取り組みにより大阪の発展に多大な貢献をされた。</p> <p>特に、大阪市における公共空間に関する取り組みとして、地下交通ネットワークの概念を導入しディアマールやクリスタ長堀により実現されたことや、水都再生に関して水の回廊の概念を導入し、舟運による都心の魅力・回遊性向上に取り組むとともに、道頓堀川の公による水辺整備により川に向けた街並み形成を民に促し地域の活性化を実現された。このように当時行政主導のまちづくりが主流だった時代から一貫して公民が連携したまちづくりを提案し実現してこられたが、近年に至っては更に、御堂筋での道路空間再編による人中心の空間の創出を先頭に立って実現に尽力されたことや、うめきた2期地区における民間による高質なみどり空間の創出にリーダーシップを発揮されるなど、全国的に見ても先進的な公民連携のまちづくりの結実に大きく貢献された。また、このことは、その後のなんば広場（仮称）や中之島東部地区における空間再編の実現にも大きな影響を与えた。</p> <p>さらに、都市の成長に関する取り組みとして、先述のうめきた2期地区以外にも、新大阪駅周辺地区や京橋・大阪城東部地区、夢洲地区などにおけるまちづくりに取り組み、今後の大阪の発展の先鞭をつける一方で、こうした取り組みによる中心市街地の空洞化の恐れに対し、観光魅力の向上と歴史・文化的まちなみの創出を地元と大阪市とがともに取り組む事業を積極的に推進するなど、都市開発と既成業務商業地とをバランスよく発展させることについて尽力された。</p> <p>以上のように田中氏は本会会員として一貫して、都市計画・建設行政を通じ常に先進的な公民連携のまちづくりを実践し地域社会への貢献は高く評価されるどころであり、日本都市計画学会功績賞を授与するに相応しいと判断した。</p>

功績賞	
受賞者	黒瀬 重幸(福岡大学 名誉教授)
授賞理由	<p>黒瀬重幸氏は、1968年に九州大学工学部建築学科を卒業後、同大学院修士課程、博士課程を修了し、総合建築設計研究所所員、国立八代工業高等専門学校講師、助教授、教授を経て、2000年から福岡大学工学部建築学科教授に就任された。その間、1996年には在外研究員としてオランダ・アイントホーフン工科大学で歩行者行動の研究を行った。2020年の定年退職後に福岡大学名誉教授の称号を授与されている。同氏は、現在に至るまで、都市計画研究に多大なる貢献をしてきた。とりわけ歩行者行動に関する一連の研究と本会九州支部の研究交流に顕著な業績を残し、都市計画研究および教育に大きな影響を与えている。</p> <p>黒瀬氏は1988年から本会会員となり、本会九州支部に所属し、幹事、幹事長、支部長を務めた。幹事長、支部長在任時には、本会九州支部総会の活性化に取り組んだ。特に研究交流に力点を置き、支部総会開催と併せて学部学生や大学院生のオールセッションおよびポスターセッションを開始した。この取り組みは、九州地方の都市計画分野の研究者・実務者・学生の交流の場として現在まで継続され、2020年からは「本会九州支部研究発表会」に発展しており、九州支部の重要な活動の一つとして定着している。また、九州支部の国際交流も積極的に推進し、支部長在任時には、九州大学の秋本福雄教授と連携して、海外の研究者を招く講演会を連続して開催し、九州支部に所属する研究者と海外の都市計画研究者との国際交流を深めた。加えて、長年にわたり、九州支部の他の研究者と連携して日本と韓国の共同研究を先導し、多くの韓国の研究者や学生と交流し、日韓の都市計画研究および教育に大きな影響を与えてきた。</p> <p>研究・教育活動としては、同氏は「都市の小地区内における歩行者流動の予測と計画に関する研究」で九州大学から博士号を授与されて以降、一貫して歩行者流動に関する分野の研究を展開した。1996年にアイントホーフン工科大学に在外研究員として在籍したことを契機に同大 Harry Timmermans 教授と都市の商業地における歩行者流動の研究を進め、国際学会での発表を重ねるとともに「Environment and Planning B」等に論文が採用され、EIRASS Conference, 2015 Elsevier Prizeを受賞する等など歩行者行動の分野の発展に寄与した。社会貢献としては、福岡市建築審査会会長や福岡県宗像市都市計画審議会会長をはじめ、福岡県を中心に九州地方の都市計画に関する自治体委員を数多く務め、福岡県・熊本県内の自治体の都市計画の指導・助言に精力的に取り組んできた。</p> <p>以上のように、黒瀬氏は、本会における九州支部活動の拡大および、都市計画分野、特に歩行者流動の分野を中心とした国際的な研究活動において、これまで多大なる貢献を果たしてきており、日本都市計画学会功績賞を授与するに相応しいと判断した。</p>

## 国際交流賞

受賞者 浅見 泰司(東京大学)

授賞理由

浅見泰司氏は、1982年に東京大学工学部都市工学科を卒業、1984年に同大学院工学系研究科修士課程を修了したのち、ペンシルヴァニア大学大学院博士課程に進学され1987年に同大学でPhDの学位を取得された。1987年に東京大学工学部都市工学科助手として着任し、以降は同大学内で空間情報科学研究センター、大学院新領域創成科学研究科、大学院情報学環などで、空間情報科学や住環境・不動産の分野を中心に、研究・教育活動の推進に尽力してきた。

本会における国際交流に関する貢献では、2012年から2015年まで国際委員長(常務理事)として学会の国際化に大きく寄与した。具体的には、韓国(Korea Planners Association)・台湾(Taiwan Institute of Urban Planning)との持ち回りで1994年以来開催してきたAsian-Pacific Planning Societies 国際会議(旧国際都市計画シンポジウム)に、新たにベトナム(Vietnam Urban Planning and Development Association)を招き入れてMOUを締結した。また国際誌Urban and Regional Planning Review(URPR)を、日本計画行政学会・日本造園学会とともに創刊した。浅見氏は創刊以来現在までURPRの編集委員長を務めている。URPRの掲載論文は110編を超え(2024年度末時点)、浅見氏の本学会の国際化や会員の国際交流における貢献の成果と位置付けられる。また、浅見氏はこれまでに数多くの留学生の研究指導を担当し、さらには日本人学生や若手研究者との共著を含めて、多くの研究成果を関連分野の国際ジャーナルに発表してきた。2017年にはReview of Urban & Regional Development StudiesにてBest Paper awardを受賞した。また2021年にはSpringerからFrontiers of Real Estate Science in Japanを出版するなど、専門分野での研究成果の国際的な発信に注力している。浅見氏が指導・輩出した多数の研究者は、現在アメリカ・イギリス・中国・韓国・バングラデシュ等で活躍しており、本学会や同会員を巻き込んだ国際的な研究ネットワークの構築に大きく貢献している。2018年には国内外の研究者を招いてInternational Conference on Spatial Analysis and Modelingを開催した。

以上のように、浅見氏は本会ならびに都市計画分野での国際交流に多大なる貢献を果たしてきており、日本都市計画学会国際交流賞を授与するに相応しいと判断した。

## 国際交流賞

受賞者 Uta Hohn(ボーフム大学地理学研究所)

授賞理由

ボーフム大学のUta Hohn氏は都市計画及び都市地理学の分野で国際的に高く評価される研究者である。特に日本の都市計画に関する研究・実践並びに両国の学術交流における顕著な貢献が認められ、2024年春の外国人叙勲で旭日中綬章が授与された。

Hohn氏が2000年に刊行した著作「日本の都市計画(Stadtplanung in Japan)」は、ドイツ学术界で高く評価され、数多くの著作賞を受賞し、ドイツにおける日本都市計画研究者として活躍されている。2004年4月発行の都市計画248号の特集「日本都市計画の情報発信」では、日本の都市計画に精通する外国人研究者の一人として寄稿された。また筑波大学客員教授として日本に滞在していた2005～2006年には、国内各地で開催された研究会や講演会で縮退都市や東西の都市改造について精力的に講演し、ドイツの都市計画事情について、多くの日本の都市計画関係者に有益な情報を提供された。Hohn氏が主宰するボーフム大学地理学研究所のメトロポリタン研究ユニットは、日本の主要な大学・研究機関と共同研究を実施し、日本の持続可能な都市計画の成果について国際的な発信を続けている。例えば、2013年名古屋大学グローバルCOEプログラム主催の日独シンポジウム「縮退する地域と都市の持続的な地域計画」での連携は代表的な成果である。

教育分野での貢献としては、国際交流協定を締結しているボーフム大学と筑波大学の間で、2005年より20年間大学院生の国際交流ワークショップを続けている。これまでにドイツ15回・日本11回のWSを開催、来日学生100名以上・渡独学生150名以上が卒業後に両国の都市計画業界で活躍しながら交流を続けており、これは将来の本会の国際交流活動の重要な礎石と成り得る功績と考えられる。実務分野では、Hohn氏が仲介役となり、2019年にボーフム市とつくば市で連携協定書が交わされた。両市の知恵と経験の交換から学ぶことは多く、市長や都市計画担当者等が両市を訪問し合い交流がなされている。

以上のように、Uta Hohn氏は、日本の都市計画研究・実践の国際的な発展に重要な役割を果たし、日本とドイツの都市計画分野における相互理解と協力を多大なる貢献を果たしてきており、日本都市計画学会功績賞を授与するに相応しいと判断した。



## 日本都市計画学会 2024 年 年間優秀論文賞受賞論文

(受賞者敬称略)

福島原発被災地域における建築動向と土地利用変化に関する研究  
先行的に避難指示解除した檜葉町を事例として

庄司 有希子、荒木 笙子、姥浦 道生

「まちを見る感性」が地域愛着及び主観的幸福感に与える影響  
主観的幸福感向上のためのまち歩き手法開発に向けた基礎的研究

安倍 ひより、藪谷 祐介

近代都市計画制度の発展過程における工場緑地の理念の変化  
工場の「庭園化」から「緑化」への展開

村上 善明、秋田 典子

家計負担から見る移動のアフォーダビリティ  
交通支出の全国網羅的把握

川合 春平、松浦 海斗、谷口 守

アメリカの雨水管理法制による開発行為等への雨水流出抑制の義務づけ  
グリーンインフラの促進と気候変動への適応を視野に

釧持 麻衣

大規模人流データを活用した駅徒歩圏の広がりや分布の計測

長谷川 大輔、巖 先鏞

東京の木造住宅密集地域の縮小と「整備地域」に関する実態考察

市古 太郎

人口フレームによる市街化区域編入と立地適正化計画運用に関する研究

浅野 純一郎

---

## 2024 年 年間優秀論文賞 選考経過

2024 年 年間優秀論文賞は、当該年の 1 月から 12 月に発表された、都市計画論文集掲載論文  
(全 193 編) の中から優れた内容を有する論文を学術委員会にて慎重に検討を重ね、授賞候補  
を選定した。さらに候補選定結果を理事会に諮って、8 編の授賞が決定した。

---

### (参考)表彰対象

1. 表彰対象 論文
2. 表彰のための選考対象となる論文

表彰当該年の 1 月から 12 月に発表された都市計画論文

論文名	福島原発被災地域における建築動向と土地利用変化に関する研究 先行的に避難指示解除した檜葉町を事例として
著者	庄司 有希子、荒木 笙子、姥浦 道生
授賞理由	本論文は、原発被災地域の中で先行的に避難指示を解除した福島県檜葉町を事例として、建築動向の実態把握を通じて土地利用変化を分析し、檜葉町全域における空間変容プロセスを明らかにした論文である。評価できる点として、第一に建築計画概要書の建築データを用いた緻密な分析により、町域全体における時系列での空間変容を明らかにしている点である。第二に、震災後の建築行為のうち新たに建築された「新築」建築物に着目し、市街地部で空き地が発生した一方で郊外部に新築が進んでいる現状から、未利用地活用を取り入れた連続的な土地利用検討の必要性を示した点、第三に、移転元地域の分析から、近隣自治体での避難住民の受け入れ可能性を示し、広域的復興支援策の検討の必要性を示した点から復興計画策定に向けて有用な示唆を得ている。以上より、年間優秀論文に相応しいと判断された。

論文名	「まちを見る感性」が地域愛着及び主観的幸福感に与える影響 主観的幸福感向上のためのまち歩き手法開発に向けた基礎的研究
著者	安倍 ひより、藪谷 祐介
授賞理由	本論文は、まちの見方の違いが、地域愛着および主観的幸福感へ影響するという仮説に基づき、まちを見る感性（視対象の選択および意味付与）が地域愛着および主観的幸福感へ与える影響の差異や、それら同士の関係性を実証的に検証した論文である。評価できる点としては、第一に、共分散構造分析によってまちを見る感性と地域愛着・主観的幸福感との関係性を定量的に検証し、今後の景観施策に対し有用な示唆を得ている点があげられる。第二に、景観構造の解釈や地域愛着、主観的幸福感について既往研究を丹念に参照・整理することで研究目的に迫るための調査・分析の枠組みを創造的に構築した点があげられる。以上より、年間優秀論文に相応しいと判断された。

論文名	近代都市計画制度の発展過程における工場緑地の理念の変化 工場の「庭園化」から「緑化」への展開
著者	村上 善明、秋田 典子
授賞理由	本論文は、1930年代の京浜工業地帯で展開された工場緑化運動に着目し、当時の社会的背景、関わった主要人物の思想、実現した内容と成果について解明した論文である。評価できる点として、第一に、これまで都市計画史研究において十分に着目されてこなかった、戦前の工場労働者の生活環境改善に向けた工場緑化運動の内実を、関連史料に基づき解明している。第二に、我が国の工業地帯における緑地整備の源流に、工場労働者の生活環境改善のための庭園整備の試みが存在したという新たな知見を示している。第三に、当時の社会行政官僚・富田愛次郎と、神奈川県都市計画課長・大野連治の職歴における接点を踏まえ、富田の社会改良の思想に基づく「庭園化」の発想から、大野による「工場緑化」という量的・技術的解決策への流れを俯瞰的に捉えるとともに、実現した工場緑化の実相を具体的に明らかにしている。以上より、年間優秀論文に相応しいと判断された。

論文名	家計負担から見る移動のアフォーダビリティ 交通支出の全国網羅的把握
著者	川合 春平、松浦 海斗、谷口 守
授賞理由	本論文は、移動により発生する世帯の金銭的な負担を網羅的に推計したうえで、世帯年収との関係について分析を行い、負担が大きい世帯の特徴を明らかにしたものである。評価できる点としては、第一に、住宅費や食費などで重視されてきた家計におけるアフォーダビリティを移動という観点で捉えており、社会的に有用な示唆が得られていることが挙げられる。第二に、全国都市交通特性調査をはじめ、十数点の統計データを活用した地道なアプローチに基づく力作である点が挙げられる。以上より、年間優秀論文に相応しいと判断された。

論文名	アメリカの雨水管理法制による開発行為等への雨水流出抑制の義務づけ グリーンインフラの促進と気候変動への適応を視野に
著者	鈕持 麻衣
授賞理由	本論文は、アメリカ法における雨水流出抑制に関する制度について、連邦法の水質浄化法に基づく NPDES のプログラムの概観、州法によって建築・開発行為にかかる雨水流出抑制策に関する独自の仕組みを設けている四州の制度、カウンティ及び市町村が定めるモデル条例のそれぞれについて分析し、その特徴を明らかにしている。法学（行政法学）的なアプローチで、アメリカの制度に関して詳細かつ総合的に紹介・分析されており、都市計画分野の論文として新たな視座を示すものである。また、アメリカ法の特徴から日本法における雨水流出抑制に関する制度の課題と示唆を提示しており、気候変動に伴う水害の激甚化、頻発化が進む日本における流域治水の取組みへの参考となること、時宜を得ており、社会的な有用性が高い。以上より、年間優秀論文に相応しいと判断された。

論文名	大規模人流データを活用した駅徒歩圏の広がりや分布の計測
著者	長谷川 大輔、巖 先鏞
授賞理由	本論文は、大規模人流データを活用して、駅徒歩圏の広がりを計測する方法を提案するとともに、駅徒歩圏と人口や商業施設の密度・駅前への集積度合いとの関係性を分析したものである。駅徒歩圏を、駅からの距離だけでなく駅からの方向も考慮して計測し、方向によって徒歩圏の広がりや分布の異なることを明らかにしている。また、商業施設の密度だけでなく駅前への集積度合いが駅徒歩圏の広がりや分布に影響していることなど、都市計画への有用な示唆となる興味深い結果も得ている。以上より、年間優秀論文に相応しいと判断された。

論文名	東京の木造住宅密集地域の縮小と「整備地域」に関する実態考察
著者	市古 太郎
授賞理由	本論文は、東京の木造住宅密集地域の減少率を時系列に分析することで、防災都市づくり推進計画策定による改善効果に関する学術的な示唆を得ようとしたものである。評価できる点としては、これまで総量のみ公表にとどまっていた木造住宅密集地域を、著者が東京都から借用した原図を用いて、町丁目単位で精密にパネルデータ化して数値地図化を行ったことが挙げられる。論文中の統計分析や考察はもとより、特に縮小実態に関する図表が有用と言える。以上より、年間優秀論文に相応しいと判断された。

論文名	人口フレームによる市街化区域編入と立地適正化計画運用に関する研究
著者	浅野 純一郎
授賞理由	本論文は、立地適正化計画が導入された 2014 年以降の市街地の拡大を意味する市街化区域編入について、大都市圏を除く地方都市の実態を子細に調査してその特徴と課題をまとめあげた論文である。評価できる点として、道府県・都市計画区域ごとの人口フレームの現状を緻密に調査し、近年編入は減少しているものの広域都市計画区域で編入が継続していること、その編入位置に立地適正化計画との整合性に課題があること、区域区分の決定主体である道県が整合性を確認する取り組みが皆無という指摘など、有益な知見をまとめている点があげられる。立地適正化計画制度が 10 年経過のタイミングで今後の制度検討に対する投げかけの視点も含まれていることも評価される。以上より、年間優秀論文に相応しいと判断された。